

PatentSQUARE：2025知財・情報フェアでの発表内容と生成AI活用の徹底調査

2025年知財・情報フェアでのPatentSQUARE展示内容

開催概要とブース情報: 2025年9月10日（水）～12日（金）に東京ビッグサイトで開催された「2025知財・情報フェア&コンファレンス」において、パナソニック ソリューションテクノロジー社は**PatentSQUARE**を出展しました^①。パナソニックのブース（小間番号 W3-59）では、PatentSQUAREに新たに追加された「**知財BIダッシュボード**」機能を含め、同サービスの最新機能を紹介しました^①。ブース来場者はPatentSQUAREの操作デモを見ることができ、実際にAI機能を使った検索や外国特許文献の調査を体験できる場が設けられていました^②。

展示内容のハイライト: PatentSQUAREは30年以上の歴史を持つ特許調査支援サービスであり、今回の展示では以下のポイントが強調されました^③：

- ・**AI検索機能**（オプション）による**自然文検索**: キーワード式ではなく日本語の文章で特許検索が可能な機能です。ユーザーが入力した文章の意味をAIが解析し、**数千万件規模の特許公報**から意味の近い記述を高精度に検索します^④。この**AI検索**により、専門知識を持たない技術者でも意図に合致した特許を見つけやすくなり、研究開発部門での先行技術調査（出願前調査）の負担軽減が期待できます^②。実際、パナソニック・富士通・三菱電機の3社共同開発により2019年にこのAI検索機能が生まれ、2020年からPatentSQUAREや富士通の「ATMS PatentSQUARE」に搭載されています^{⑤ ⑥}。従来のキーワード検索に比べ**1.5～2倍の検索精度向上**も確認されており、熟練者でなくとも高精度な特許調査が可能になりました^⑦。
- ・**AI自動分類機能**（オプション）による**ノイズ低減**: 新着特許公報をAIが自動で分類し、不要な文献を除外する機能です。これにより、毎月発行される大量の公開特許公報（SDI調査）の中から**重要なものだけを絞り込む**ことができます。AIの客観的な判断でノイズとなる特許を排除し、**査読すべき文献数を削減**できるため、調査の効率と精度を高めます^②。例えば、住友電工の知財部門ではこの機能により**年間1,800時間の調査工数削減**を見込むなど、大幅な効率化効果が報告されています^{⑧ ⑨}。技術者による分類のバラつきや熟練者への負荷集中といった課題も緩和され、日常的な特許監視業務の省力化に寄与しています。
- ・**知財BIダッシュボード機能**（新オプション）による**特許情報の可視化・分析**: 2024年9月に提供開始した最新機能で、PatentSQUARE上で**最大100万件**もの特許データを一括分析・グラフ化できる高度な分析ツールです^{③ ⑩}。目的別に11種類のグラフテンプレートを備え、出願人別の動向比較や技術分野の成長性分析など、IPランドスケープに必要な視点で特許情報を可視化できます^{⑪ ⑩}。データの収集・整理からグラフ作成まで**すべてPatentSQUARE内で完結**し、他のツールを併用する必要がありません^⑪。今回の展示では、この知財BIダッシュボードを用いて国内・海外特許を横断的に分析するデモが行われ、**グローバル規模の特許分析**による戦略立案支援が紹介されました^{⑫ ⑬}。例えば、新興技術領域や競合他社の出願動向を一目で把握し、自社の研究開発戦略に役立てることが可能になります^⑭。

以上のように、2025年の知財・情報フェアでは「**検索（AI）～分類（AI）～分析（BI）**」までを一気通貫で支援するPatentSQUAREの総合力がアピールされました。特に新機能のBIダッシュボードと既存AI機能の連携

により、国内外特許の調査から分析までPatentSQUAREだけで完結するワークフローが実現できる点が来場者の注目を集めました 3 10。

PatentSQUAREのユーザー層と機能進化

対象ユーザーと導入実績： PatentSQUAREは特許調査の専門家から現場の技術者まで幅広いユーザーを対象に設計されています 15 16。知財部門の担当者だけでなく、調査ノウハウを持たない研究開発者でも使いやすいインターフェースと支援機能を備えていることが特徴です 15 2。1992年のサービス開始以来、機械・電機・化学・医薬など多様な業界で活用されており、特許登録件数上位100社の多くが導入する国内シェアNo. 1の特許情報サービスへと成長しています 17 16。大量の公式特許データ（日本を含む約100か国分）を網羅しつつ、高速レスポンスと数万人規模での安定稼働を実現している点も企業利用における強みです 18。

機能強化の歩み： 長年にわたりユーザーの要望を取り入れて改良が重ねられており、その進化は業務ニーズの変化に対応する形で段階的に進んでいます。

- ・1990年代～： 当初は特許庁発行のCD-ROM公報データを蓄積し社内サーバー経由で検索するサービスとしてスタートしました 19。ネットワーク経由で手軽に特許公報を検索できるASPサービスとして普及し、基本的なキーワード検索や書誌項目検索を提供。
- ・2010年代後半： AI技術の進歩を背景に、「AI検索」オプションを開発（2019年発表、2020年提供開始） 5。従来のキーワードマッチングに対し、ディープラーニングによる意味検索を導入することで検索精度を向上させました 7。三菱電機での実証実験を経て実用化されたこの機能は、富士通の特許検索システム（ATMS）にも搭載され、業界に先駆けた取り組みとなりました 5 20。
- ・2020年代前半： 続いて「AI自動分類」オプションを実装（提供開始時期は2021年前後と推測）。膨大な新着特許公報をAIがあらかじめ振り分けることで、担当者は重要度の高い文献に絞って確認できるようになりました。実際に旭化成やカネカなどの大手メーカーがこの機能を活用し、特許監視業務の省力化と調査品質の均一化に成功しています 21 22。例えばカネカでは、AI自動分類の導入により月約1000件にも及ぶSDI調査対象のノイズ除去作業を大幅に効率化し、人手による分類遅れや漏れを解消したといいます 23 24。
- ・2024年： ビッグデータ時代のニーズに応え、「知財BIダッシュボード」を新開発（2024年9月正式リリース） 25。特許調査フェーズから一歩進んで、経営に資する知財分析（IPランドスケープ）を容易に行える環境を提供開始しました 26。テンプレートに沿った簡単操作で大量特許データの可視化が可能となり、他部署へのレポートや経営層への説明資料作成にも威力を発揮します。開発背景には「知財を“守り”から“攻め”に転じる動きを支援したい」という狙いがあり、特許情報を経営戦略に役立てるためのツールとして位置づけられています 26 27。

このようにPatentSQUAREは特許検索→選別→分析という一連の知財業務プロセスに対応する機能群へと発展してきました。他社製品では個別に提供されることも多い各種機能をワンストップで利用できる点は、PatentSQUAREの大きな差別化要素と言えます 11。例えば、類似文献検索AIや特許分類AI、分析ダッシュボードを別々のツールで賄う場合、それぞれの導入・連携コストが発生しますが、PatentSQUAREなら一つのプラットフォーム上でシームレスに実行可能です 10。

生成AI技術の活用動向と他社との差別化

PatentSQUAREにおける生成AIの位置づけ： 近年話題の生成AI（大規模言語モデル＝LLM）について、PatentSQUAREは現時点で直接対話型の機能（チャットボットや自動要約など）は公式には提供していません。しかし、社内外からその活用が期待されており、例えば導入企業の一つである住友電工知財テクノセン

ター様は「今後もPatentSQUAREに対しては、生成AI技術を取り入れるなど、特許調査の利便性を向上させる機能拡充に期待している」とコメントしています²⁸。パナソニック ソリューションテクノロジー社自身も、「特許情報の活用促進に向け、今後もAI・ICT技術を生かしたサービス開発に取り組む」と表明しており²⁹、将来的にLLMなど生成AIを組み込んだ新機能が登場する可能性があります。

現行AI機能との関係： PatentSQUAREが提供するAI検索・分類機能は、いずれもディープラーニングなどAI技術を活用した高度なものです。生成AIとは**アプローチの異なるAI**です。AI検索は膨大な特許文章を学習したモデルで**関連文献を検索**する仕組み、AI自動分類は学習モデルで**文書のカテゴリ判定**を行う仕組みであり、いずれも**ユーザー入力に対し直接文章を「生成」するものではありません**⁷。一方、ChatGPTのような生成AIは質問に対して新たな文章や要約を生成できるため、特許調査分野でも**要約作成や調査レポート自動化、対話型の特許相談**などへの応用が期待されています^{30 31}。PatentSQUAREでは2024年以降、この動向を踏まえて**セミナーや情報発信**を行っており、例えば2024年9月には「**特許調査を高精度に！知っておきたい生成系AIの活用術**」と題するウェビナーを開催し、生成AIを特許調査に活かすポイントを解説しています³²。このセミナーでは生成AIの利点・注意点や、PatentSQUAREの新機能（知財BIダッシュボード）との組み合わせによる分析手法などが紹介され、ユーザーの関心に応える内容となりました。

他社ツールとの比較： 特許調査・知財業務支援ツールの業界では、各社が生成AIを取り入れた新サービスを打ち出しています。2025年の知財・情報フェアでも、多くの出展企業が生成AI関連のソリューションをアピールしていました。例えば：

- ・**パテント・インテグレーション株式会社：** 生成AIを活用した読解支援AIアシスタント「**サマリヤ**」を発表しています。これは特許文献の内容を要約したり質問に答えたりする**対話型アシスタント**で、膨大な特許文献を素早く理解するのに役立つとされています³³。
- ・**株式会社IPファイン：** 「生成AIで加速、無限の可能性！」をキャッチコピーに、知財業務の革新を掲げた**AIワーカー**というサービスを紹介しました³⁴。詳細は不明ですが、複数の知財関連業務を自動化・高度化する生成AIソリューションのようです。
- ・**株式会社ASU（アズユー）：** 特許事務所向け出願支援ソフト「PPW8」と連携する**生成系AIサービス「Alco（エーアイコ）」**を新リリースしています。明細書作成や先行技術調査の補助に生成AIを使う取り組みと思われます。
- ・**Amplified社（米国）：** AI特許検索プラットフォーム“**Amplified**”では、特許番号や技術概要を入力すると、世界中の特許を読んだAIが関連文献のリストを提示する機能を提供しています³⁵。こちらも生成AI的なアプローチでユーザーの問いに答える形式に近く、特許調査時間を大幅に短縮可能と宣伝されています³⁵。

これら新興サービスは生成AIの最先端技術を取り入れ、**特許調査のインタラクティブ化・自動化**を進めている点が特徴です。対してPatentSQUAREは、既述の通り長年培った**安定した検索基盤と信頼性**を強みに、段階的にAI機能を拡充してきました。他社との差別化要素を整理すると次のようになります：

- ・**実績と信頼性：** PatentSQUAREは大企業での大規模運用実績が豊富で、検索精度やデータ網羅性に定評があります¹⁷。長年のユーザーニーズ蓄積に基づく細やかな機能（例えば日本語ゆらぎ検索や同義語辞書機能など）も充実しており、**専門調査にも現場調査にも対応できる柔軟性**があります³⁶。一方、新興の生成AIツールは革新的な反面、特許データ網羅性や精度・安定性の点で未知数な部分もあります。
- ・**統合プラットフォーム：** 前述のようにPatentSQUARE上では検索から分析までワンストップで行えるため、**データの一貫性や操作性の統一**が図られています¹⁰。他社の場合、生成AIで得た結果を別の特

許データベースで検証したり、複数ツール間でデータを行き来させる必要があるケースも考えられますが、PatentSQUAREは一つの環境で完結する点が評価されています。

- ・**AI+人間のハイブリッド**： PatentSQUAREは現状、生成AIによる完全自動応答ではなく、**AI機能で絞り込んだ結果を人間が判断・分析する**スタイルです。例えばAI検索で関連特許集合を作り、人が読むべき重要文献を抽出し、BIダッシュボードで全体傾向を分析する、といった使い方です。生成AIツールは自動要約や提案を行います、その**内容の正確性（いわゆる幻覚問題）**が課題とも言われます³⁷。PatentSQUAREはまず専門ツールとして高精度に関連情報を網羅し、人間の意思決定を支援するポジションにあり、**AIの結果を最終判断に活かすユーザー主導型**のスタンスと言えます。

将来的には、PatentSQUAREもこうした生成AI技術と連携することで更なる効率化が可能だと考えられています。実際、2024年には「**AI特許調査ツールと生成系AIの連携**」に関する**研究発表**が行われ、PatentSQUAREやPatentfieldといった既存ツールにChatGPTやGoogle GeminiといったLLMを組み合わせる新たな可能性が示唆されています^{38 39}。この研究では、生成AIに検索結果の評価・要約をさせることで調査精度を向上させるアイデアなどが提案されており、PatentSQUAREのような専門ツールと生成AIの“**いいところ取り**”による知財業務効率化に期待が寄せられています。

今後の展望

PatentSQUAREの今後： PatentSQUAREは長年にわたる改良を経て、特許情報の収集・分析に関する総合プラットフォームへと進化してきました。今後は、この基盤の上に**生成AIを含む先端技術をどう取り入れるか**が焦点となるでしょう。パナソニックは「お客様の特許情報活用促進に向けてAI・ICT技術を活かしたサービス開発・改良に今後も取り組む」と明言しています²⁹。具体的な将来像としては、以下のような展望が考えられます：

- ・**特許文献の自動要約・QA機能**： PatentSQUAREに生成AIを組み込み、検索した特許文献のポイントを自動要約したり、ユーザーの質問に対して調査結果に基づく回答を提示したりする機能。これにより、膨大な特許を読む手間をさらに削減し、知りたい情報に迅速にアクセスできるようになる可能性があります。
- ・**明細書作成支援**： 発明の内容を入力すると、関連する先行技術を踏まえた特許明細書ドラフトを生成AIが作成する、といった機能も研究が進んでいます^{40 41}。今は研究段階ですが、PatentSQUAREが他社（例えば前述のASUのAlco等）と連携して明細書作成支援を提供すれば、出願準備業務までカバー範囲を広げること考えられます。
- ・**他システムとの連携強化**： 特許情報だけでなく、意匠・商標や訴訟情報、技術文献など**知財・技術情報の統合**もトレンドです。PatentSQUAREは既に外部の知財管理システム（AnaquaのAQXなど）と親和性が高い例もあります⁴²が、将来は生成AIを用いて異種データ間の関連性分析（例えば**特許と市場データの相関**や**論文と特許のクロス分析**）など、より広範な知財情報プラットフォーム化が期待されます。

総じて、PatentSQUAREは「**堅実な進化路線**」を歩みつつ、必要に応じて最先端技術も取り込むバランスの取れた戦略をとっています。現時点では生成AIの導入について公式発表はありませんが、ユーザー企業からの要望や市場の趨勢を踏まえて、適切な形で実装されていく可能性が高いでしょう^{28 29}。知財業務における生成AI活用はまだ発展途上とはいえ⁴³、PatentSQUAREのような基盤が整ったツールと融合することで、今後ますます知財部門・技術者の強力なパートナーになっていくと考えられます。

参考資料： 本調査では、パナソニック社の公式発表（プレスリリース）や製品サイト^{1 2}、知財・情報フェア公式サイトの出展者情報³、導入企業の事例インタビュー²⁸、業界ニュース記事⁴⁴、および知財

専門メディアの記事³⁸等を参照しました。各種一次情報を基に最新動向を整理していますが、生成AI分野は日進月歩であるため、今後の公式アップデートにも注目が必要です。

1 2 3 4 6 9 10 11 28 29 39

1 12 13 14 パナソニックが特許調査支援サービスの分析機能をバージョンアップ。新たに外国文献の知財情報分析が可能に | パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社のプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000154.000062053.html>

2 15 17 「2022特許・情報フェア&コンファレンス」にパナソニックの特許調査支援サービス「PatentSQUARE」を出展 | パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社のプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000051.000062053.html>

3 18 知財・情報フェア&コンファレンス
https://www.expo-form.com/united2025/usr_detail.php?ucd=93

4 5 7 mitsubishielectric.co.jp
<https://www.mitsubishielectric.co.jp/ja/pr/pdf/2019/1101-a.pdf>

6 20 31 35 40 41 43 知財業務 生成AIでどこまでできる？【知財HR】
<https://hr.tokkyo-lab.com/column/pinfosb/chizaigyomu-ai>

8 9 21 22 23 24 28 42 導入事例 | 特許調査支援サービス「PatentSQUARE」 | Panasonic
<https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare/casestudy.html>

10 25 27 29 パナソニックの特許調査支援サービス「PatentSQUARE」が特許情報分析機能を強化。最大100万件の文献を対象に知財をBIで可視化する新機能「知財BIダッシュボード」をリリース | パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社のプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000125.000062053.html>

11 16 26 44 パナソニック「PatentSQUARE」が特許情報分析機能を強化、新機能「知財BIダッシュボード」をリリース | +VISION®【プラスビジョン】
<https://vision00.jp/topic/9454/>

19 「PatentSQUARE」とは、どのようなサービスですか？ | FAQ | お問い合わせ | パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社
[https://faq.it-sol.panasonic.biz/faq/show/1027?](https://faq.it-sol.panasonic.biz/faq/show/1027?category_id=218&return_path=%2Fcategory%2Fshow%2F218%3Fpage%3D1%26site_domain%3Ddefault%26sort%3Dsort_access%26sort_order%3D)
[category_id=218&return_path=%2Fcategory%2Fshow%2F218%3Fpage%3D1%26site_domain%3Ddefault%26sort%3Dsort_access%26sort_order%3D](https://faq.it-sol.panasonic.biz/faq/show/1027?category_id=218&return_path=%2Fcategory%2Fshow%2F218%3Fpage%3D1%26site_domain%3Ddefault%26sort%3Dsort_access%26sort_order%3D)

30 37 38 39 AI特許調査ツールと生成系AIの連携による高精度化検討 - J-Stage
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/advpub/0/advpub_2024-026/_html/-char/ja

32 バックナンバー | 特許調査支援サービス「PatentSQUARE」 | Panasonic
<https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare/backnumber.html>

33 34 知財・情報フェア&コンファレンス
https://www.expo-form.com/united2025/usr_list.php?exh=6

36 特許調査支援サービス「PatentSQUARE」 | Panasonic
<https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare.html>